

香美市の過疎村落にある金峰神社の再建プロジェクト

渡辺 菊真*

(受領日：2017年5月12日)

高知工科大学システム工学群
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: watanabe.kikuma@kochi-tech.ac.jp

要約：本稿は、香美市土佐山田町中後入に立地する、金峰神社の社殿再建プロジェクトの実践記録である。金峰神社は中後入の谷間地区の氏神であり、本殿の棟札から遅くとも江戸中期には当地に鎮座していた神社であることが確認できる。また明治初期には9戸の氏子が存在していたことが村誌に記されている。しかしながら近年の過疎化のなかで、氏子は次々この地を去り、現在は1戸を残すのみとなってしまった。それに伴い社殿の維持も困難になり、2015年の大雨により、社殿は傾き崩壊の危機にさらされるに至った。金峰神社社殿再建プロジェクトは、この緊急事態に陥った社殿を再建し、氏神として復活維持していくことを目指すものである。また、それと同時に同様な状況にある過疎の氏神復興と、その継続維持のための有効な手がかりのひとつとなることも祈念されている。

1. 金峰神社の概要

金峰神社は明治の神仏分離以前は、蔵王権現宮と称されていた。その名からも修験道（我が国固有の山岳信仰と仏教との混淆宗教）と関わりが深い神社であったことが読み取れる。当社の本殿からは天明7年（1787）の棟札が存在し、そのことから18世紀末には社殿があったことがわかる^{1,2)}。また明治初期には金峰神社（元蔵王権現宮）が当地にあったことが記録³⁾に残されており、それによると社殿と鳥居1基があると記され、現神社の構成要素と一致する。

現社殿と鳥居の構成を図1に示す。鳥居とそこを起点に社殿まで一直線に続く石段は南北軸から東方向に20度傾いている。また社殿の中心軸は西から30度南に向く。社殿のある敷地は急斜面を造成した狭小地であり、その地勢に沿って社殿の向きを決定したと推察しうが、2016年度に実施した測量調査により、この社殿構成軸の正確な延長線上に、御在所山山頂の葦生大山祇神社が位置することが判明した。御在所山が物部川流域圏の中でも有数の修験の聖山であることを考慮すると、この社殿の向きは明確な意図のもと設定されたといつてよいであろう。

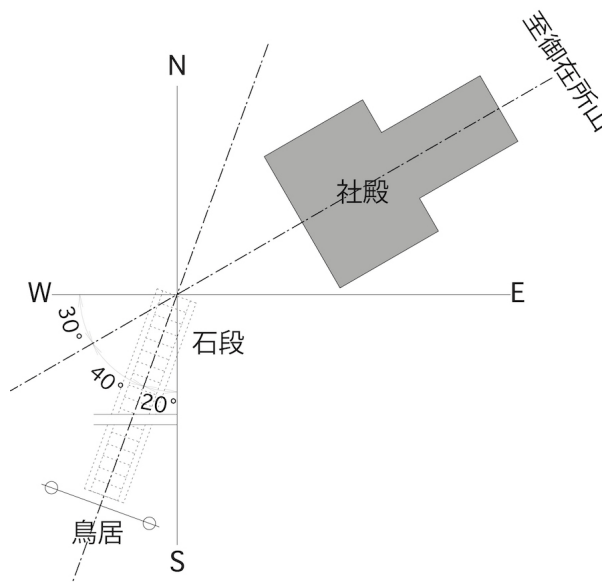


図1. 金峰神社の社殿と鳥居の方位概略図

社殿は入母屋屋根妻入の拝殿背後に、切妻屋根の本殿覆屋が棟を共有して接続するT字型平面を有する。拝殿は正面2間、側面1間半、覆屋は正面1間、側面1間半である。覆屋の床は拝殿から200mm上げ、後半部分をさらに200mm上げて、本殿を据える。床面上昇により本殿の聖性を強化する設計

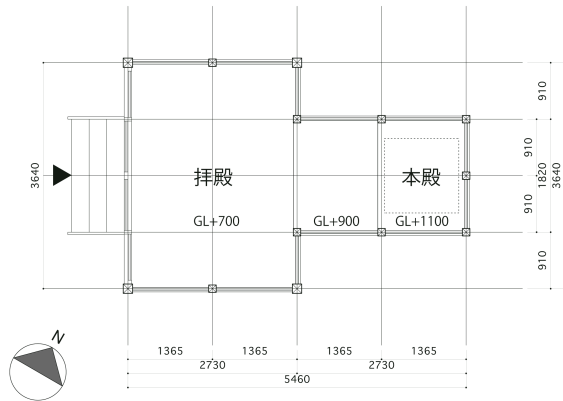


図 2. 金峯神社の社殿平面図



図 3. 傷みの激しい金峯神社社殿

意図が見て取れる。本殿は一間社春日造の小社である（図 2）。鳥居は鉄筋コンクリート造で柱に昭和 13 年建立と刻まれている。

2015 年の大雨により、拝殿正面左手の柱が根元から折れており、拝殿は左に大きく傾いている。それに伴い正面木階が倒壊、棟木も大きく湾曲している。また拝殿正面開口上部の桁も柱から抜け落ち、建具を押さえつけているため、社殿内へと侵入することができない（図 3）。社殿の傾きは日々増しており、社殿倒壊の危機にさらされている。社殿倒壊は、内部にある本殿の倒壊、さらには本殿内部のご神体の損傷にも直結し、その早期救済が望まれている。

2. 金峯神社再建の計画

2.1 金峯神社再建に向けての条件整理

金峯神社再建にあたり、社殿の現況、再建の方法について整理した。

1. 金峯神社の社殿は柱・梁などの構造部材の損傷が激しく修復は無理と判断した。なお、再建にあたっては現社殿を解体し、その後、社地を整備したあとに、新たに社殿を建設する。
2. 金峯神社社殿内の本殿および内部に安置されているご神体を救出する必要がある。そのためには解体前に社殿内から別の場所に移動させることとなる。移動場所には本殿とご神体を存置するための建築が必要である。
3. 現社地は狭小であり、本殿を存置するための建築を設置する余地がない。また、社殿解体・再建の際に必要な最小限の余地がないと建設が遂行できない。本殿存置のための建築は山麓の開けた場所（古民家周辺）に設定することが妥当である。
4. 現社地および山麓の古民家周辺ともに、車でのアクセスが不可能であり、建築資材は 1 km ほど人力で運ぶ必要がある。
5. 金峯神社の氏子が 1 人であるため、再建の予算は極めて限られてくる。建設には安価で自力建設が可能な工法を採用する。
6. 建築の維持監理も容易となる工法を採用する。

2.2 金峯神社再建の計画指針

上記条件を受けて以下のような計画を策定した。

1. 現社殿は解体する。
2. 現社殿内にある本殿とご神体を仮に安置する社殿を別地に建設する。この仮社殿を元来の社地を遷座するための遷座殿と位置づける。
3. 遷座殿の建設地は十分な面積があり、参拝にも比較的便のよい古民家周辺の畠地とする。
4. 遷座殿建設後、社殿を解体し新社殿を建設する。
5. 新社殿建設後、本殿とご神体を、遷座殿から新社殿へと遷座する。
6. ご神体遷座後は遷座殿を解体する。
7. 遷座殿、新社殿は人力で運搬可能かつ安価な資材で構築する。
8. 遷座殿、新社殿ともに自力建設で実現可能、かつ、維持監理も容易となる工法を採用する。

3. 金峯神社遷座殿の建設

3.1 遷座殿の計画指針

上記計画を前提に遷座殿の計画指針を以下のように定めた。

1. 現社殿は社殿内のご神体を安置するとともに、原信仰核とも言える御在所山に向けた遷座機能を持つ。遷座殿もこの性質を継承し、ご神体

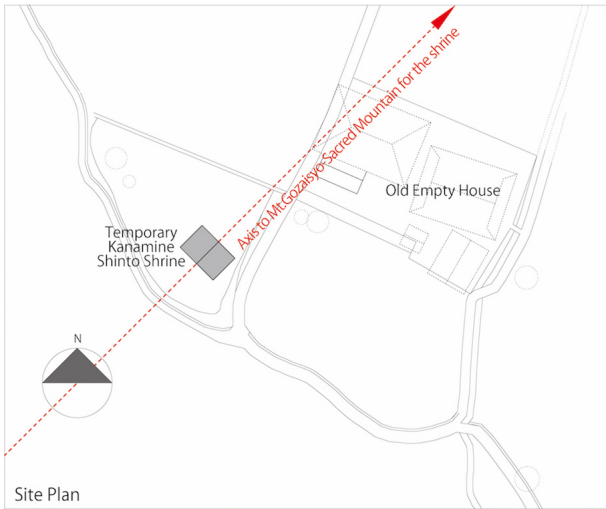


図4. 遙拝殿の配置図

を安置するとともに、御在所山を遙拝する機能をもたせる。

2. 人力で運搬可能、施工可能、安価であることを満たす工法として、構造を建築工事足場用の鋼管パイプで構築し、床・屋根材などは高知産杉材とする。
3. 迅速で簡便な施工が可能なように、使用する鋼管パイプ、杉材ともにカット不要な規格サイズのままのものとする。
4. 台風時の暴風、地震に耐えうる構造とする。

3.2 遙拝殿の設計

計画指針をもとに具体的な設計をおこなった。

1. 配置計画
遙拝殿の中心軸が御在所山山頂へと達するような配置計画とした（図4）。
2. 平面計画
幅6m、奥行4mの矩形平面とし、その中央2m四方を内陣とする集中形式の平面を採用することで求心的な空間を形成した（図5）。
3. 断面計画
底辺が6mの直角二等辺三角形とし、両斜辺が地面直上まで達する切り妻の大屋根となるようにした。この形状は原信仰核である御在所山の山型を象るとともに、神社建築の原始形態とされる「天地根源造」も象り、根源的な信仰空間となることを意図している。その一方で内陣は地面から450mm上方に浮遊させ、その四周の壁も木格子とすることで透過性を高め、この社殿が聖山を遙拝するトンネル空間にもなるよう留意した（図6）。

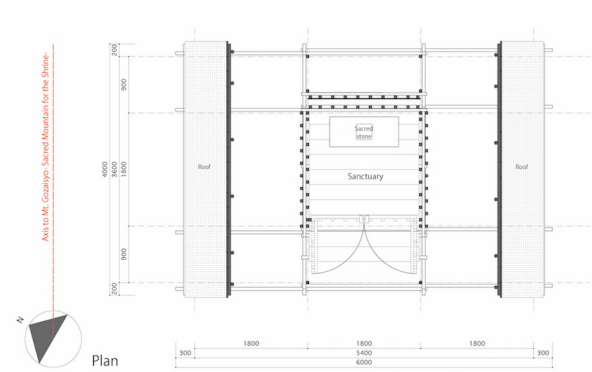


図5. 遙拝殿の平面図

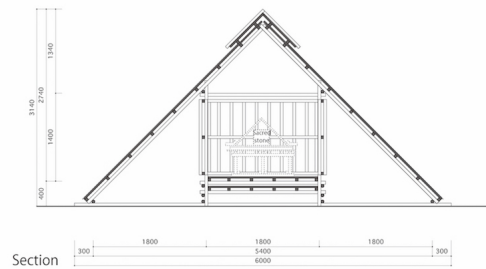


図6. 遙拝殿の断面図

4. 構造計画

直角二等辺三角形の断面形状とすることで、建築の重心を可能な限り下げ、構造的に安定する形状とした。また建築周囲に8本の木杭を打ち込み、ロープにより鋼管パイプと緊結することで暴風時にも耐えうるよう留意した。構造強度については構造計算により、安全性を確認した。

5. 規格計画

鋼管は4mと2mの2種のみを、カットせずに使用した。材木は床と屋根に幅240mm×長さ2m、厚24mmの杉厚板の荒材と、45mm角、長さ4mの杉垂木を使用した。これらはともに可能な限りカットせず使用し、必要最小限のカットを鋸で行った。屋根防水には7尺のポリカーボネート波板をカットせず使用した。

3.3 遙拝殿の建設

遙拝殿建設は2016年6月18日から23日にかけての6日間でご神体が遷座可能な状態まで施工し、7月2日の遷座後と、その翌日の残工事の実施を経て7月3日に竣工した。なお資材の購入と運搬は施工に先立つ6月15日に行った。建設メンバーは高知工科大学システム工学群、環境建築デザイン研究



図7. 鋼管パイプによる建築構造



図8. 屋根の施工

室の渡辺菊真と、その学生10名（学部4年生～修士2年）の計11名である。

1. 資材運搬

6月15日、香南市で購入した鋼管パイプ類などの資材を旧佐岡小学校前まで車両にて運び込み、木材は高知市の材木屋に同所まで運搬していただいた。資材は、そこから建設地までおよそ1kmの道のりを徒歩にて幾度も往復して運搬した。なお細かい工具はバイクで運び込んだ。材木の一部については地元の方のご好意により軽トラックで建設地の200m手前まで運搬していただいた。

2. 整地

6月17日、古民家に隣接する畠地に設置した建設敷地の不陸を「どんつき」とスコップを使用して整地した。整地に先立ち高知工科大学国土情報処理研究室によって敷地から御在所山への方位を測量にて明示していただき、それをもとに遥拝殿設置位置と方位を定めた。

3. 建築構造部の建設

6月18日に施工を開始した。鋼管パイプにて構造部となる骨組みを構築した（図7）。

4. 屋根と床の施工

6月19日～21日、屋根の施工を開始する。鋼管パイプに垂木止めクランプを設置し垂木をはわす。そこに厚板を打ち、大屋根を形成した。防水措置として厚板の上からポリカーボネイト波板を打ち付ける。次いで内陣床を施工した。屋根同様、垂木止めクランプに根太をはわす。その上に厚板を打ち付け床とした（図8）。

5. 格子壁と建具の施工

6月23日、内陣の四周に格子壁を垂木によって形成する。格子壁と同じピッチの格子状建具も

施工した。格子建具の部材が回転してひずまないよう、金具を随所に設けて形状固定した。遷座までの施工が完了した。

6. ご神体遷座と残工事

7月2日、社殿側面の板壁の一部をはがし、社殿内部に侵入し、本殿移動を試みた。しかし、重量過多であること、遥拝殿までの道のりが険しいこともあり断念した。その結果、本殿内のご神体のみを遷座することとなった。祈祷を終えて山麓の遥拝殿へ遷座した。遷座後ご神体背後の格子壁のみ板を打ち付け、視線がご神体背後から侵入しないよう配慮した（神主さんの希望による）。7月3日、ご神体を覆う仮の本殿を施工する。また、遥拝殿脇に走る溝に川の石を敷き詰め、雨天時に水がつかないようにした。以上をもって遥拝殿は竣工した（図9）。

資材運搬から建設完了まで、幾度も雨天に見舞われ、極めて悪条件の中での施工であった。

4. 金峰神社例祭の復活

2016年10月10日、金峰神社、秋の例祭が遥拝殿にてとりおこなわれた。同神社の氏子が1戸になってしまい、しかも2015年の大雨以降は社殿に入ることもできなくなり、例祭は途絶えたままになっていた。実に10年ぶりの例祭復活であった。例祭には、氏子はもちろん、かつてここで住まわれていた旧氏子やそのご家族も参礼され、さらにはこの地の新たな里山創成を目指し活動していく高知工科大学の教員や学生たちも参列した。参列者は実に50名近くにも上った。遥拝殿は鋼管パイプによる仮の社殿ではあるものの、「生きた」社殿がここに在ることに、氏子、旧氏子ともに、とても喜び懐かしんでおられた。神社が「生きた」場所として在る



図 9. 竣工した遥拝殿

こと、それを継続していくことの意味の深さが祭礼風景として参礼者に刻み込まれることとなった。遥拝殿竣工後も建設を担った学生による社殿周辺整備だけでなく、農作業で同地を訪れる近隣の方（旧氏子）の手入れも行き届き、2017年の正月に仮本殿にお酒が奉納されるなど、神社として一度止まった時間が再び動き出している（図10）。

5. 金峰神社遥拝殿の建設以後

金峰神社遥拝殿にご神体が仮遷座したものの、傾いた社殿に本殿は存置されたままとなっていた。社殿は夏と秋の雨の多い季節を経てますます傾き、いつ崩壊するともわからない状況であった。しかし、本殿の重量は過大であり、大人が数人でようやく持ち上げられる程度である。仮に持ち上がっても近距離にしか移動できないのは明らかであった。そこで、社殿前の狭小な空隙地に覆屋を建て、そこに本殿を移設する計画を立てた。しかしながら空隙地に建設しうる建築の規模は3m四方が限度であり、本殿をどうにかおさめうる最小限寸法の覆屋となることが宿命づけられた。また、社殿前に覆屋を建設したとして、最終的には社殿解体後に再び新たな社殿を建設する必要がある。ただ、幾つもの社



図 10. 遥拝殿で開催された例祭

殿を建設するような予算がないことは先述したとおりである。そこで、この覆屋が最終的に新社殿となるよう設計し、本殿を移設、社殿解体したのち、社地整備を経て、旧社殿地に移築（曳家）できるよう計画した。具体的には鋼管パイプの構造下部に8基のキャスター（車輪）を設置する社殿を計画したのである。これを祇園祭の山車よろしく移動する社殿＝山車社殿とした。山車社殿建設の条件の厳しさは遥拝殿以上であり、過酷を極めた。資材運搬は人力で急斜面の山道を幾度も往復せねばならず、建設地は狭小なだけでなく片側は崖で危険きわまりない。建設時期が真冬であり、極限的な現場状況であった（図11）。建設は12月9日から23日にかけて行われ、12月28日には土佐の大工、沖野棟梁の協力で本殿の救出と社殿の解体を完遂し、悲願であった本殿の移設が実現した（図12）。現在は解体した社殿の部材を整理し、その過程で取り出された棟札や神具をとりまとめる小さな神庫（神具をおさめる倉庫）を建設中である。今後は不安定な社地の地盤安定化や樹木の部分伐採を含む社地整備を高知工科大学社会システム工学コースの大学院生が担う予定であり、その後、山車社殿を本来の社殿設置位置に曳家することになる。

6. 金峯神社のこれから

崩壊の危機にあった金峰神社を再建するため、まずは山麓の地の遥拝殿を建設し、そののちに本殿を安置する山車社殿を元来の社地に隣接して建設した。社地整備を終えると山車社殿を曳家して旧社地に改めて設置し、ご神体を還座することで神社再建とし、役目を終えた遥拝殿を解体する。これが当初の計画であった。しかしながら、山腹にある社



図 11. 山車社殿の施工風景



図 12. 竣工した山車社殿と移設された本殿

地へ通じる里道は険しく、社地も狭小で、高齢である氏子と旧氏が参拝することは困難であり、ここで例祭を行うのは現実的ではないと思われる。さらに遥拝殿建設を経て、金峰神社の新たな氏子となる高知工科大学の面々が祭礼に加わるとなると、敷地の狭小さはより深刻である。この状況を鑑みると以下のような在り方が今後の金峰神社の在り方としてふさわしいのではないかとと思われる。

1. 山腹の社地に設置された山車社殿と、そこに安置された本殿が、新社殿となり、ご神体も本殿内に安置される。常時はこれが金峰神社社殿となる。
2. 山麓の遥拝殿は解体せず存置し、例祭は遥拝殿にて行う。その際、ご神体は山腹の山車社殿から遷座し、例祭後に還座する。神社に見られる御旅所（山麓にある神社のご神体が祭礼時に里に下りてくる時に仮安置される場所）の役割を遥拝殿が担う。
3. 山車社殿、遥拝殿の維持監理は高知工科大学が担う。施工、維持監理ともに簡便な工法を採用しており、維持の継続も十分に可能である。
4. 将来的に同地に移住者が定着した場合は神社の日常的な維持監理を居住者が担う。ただし社殿の補修等は高知工科大学が担当する。

金峰神社のように、過疎地の神社再建を大学が担うというのは一般的な状況ではなく、その意味で普遍性があるとは言いがたい。しかし、維持が困難な氏神がある場合、高額な補修を行うのではなく、自ら建設でき、維持できる工法を採用して社殿を造営し、氏神を継続させていくことも必要なのではないか。また、遥拝殿と新社殿（山車社殿）の関係のように、状況に応じて神社や祭礼の在り方を更新していくことも重要だと思われる。金峰神社社殿の解体の際に実に 8 枚もの棟札が保管されていたのを発見した。それによると、金峰神社は当初は蔵王権現堂という寺院であり、その後、蔵王権現宮として神社化し、同時に社地も移動していることがわかる。さらに明治初期の神仏分離令により金峰神社となった。社殿建築にも幾つもの増築跡があり、状況に応じて信仰形態も社殿形態も変容させてきたことがわかる。このような神社来歴を思うとき、今回の社殿再建プロジェクトも大きな状況変転に応じた氏神の更新様態として捉えることができよう。今後、当地では新しい里山創成に向けての各プロジェクトが始動進行する予定である。その様態に応じて金峰神社もその在り方を進化かつ深化させていくであろう。

文献

- 1) 土佐山田町史編纂委員会 (1979), 『土佐山田町史』, 土佐山田町教育委員会
- 2) 前田和男 (1976), 『土佐山田町の社寺祠堂』, 土佐山田町教育委員会
- 3) 高知県香美郡土佐山田町役場, 『高知県香美郡町村誌 佐岡村』

Reconstruction Project for the Kanamine Shinto Shrine in a Depopulated Village Area in Kami City

Kikuma Watanabe*

(Received: May 12th, 2017)

School of Systems Engineering, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

* E-mail: watanabe.kikuma@kochi-tech.ac.jp

Abstract: The objective of this paper is to report on the reconstruction project of the Kanamine Shinto Shrine in a depopulated village area in Kami City. For over 200 years the village consisted of nine houses which made up the Kanamine Shinto community. However, the village population started to decrease, resulting in only one house and a neglected shrine remaining that in 2015 were severely damaged by a strong typhoon. In 2016, the building of worship faced a structural crisis and collapsed.

This project aims to reconstruct the building of the Kanamine Shinto Shrine, and restore and maintain the shrine as the core of the Kanamine Shinto community. Also, hopefully this project will be the clue that will lead to the revival of the Shinto communities in other depopulated villages.